

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：74306

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520274

研究課題名(和文)大島本『源氏物語』の本文復元研究

研究課題名(英文)Full restoration research Oshima book "Tale of Genji"

研究代表者

藤本 孝一 (fujimoto, kouichi)

公益財団法人古代学協会・その他部局等・研究員

研究者番号：90124320

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：大島本源氏物語の原本の擦消。改変などを調査した。その結果「とん」が抹消されて「とも」に改編されている。「ん」の字は10世紀段階では、「も」と「む」と表現されている。そうすると、本来の「とん」は意味が通じない語彙であるため「とも」と、後世に直っされていることは、大島本は10世紀の用語が残っている写本となる。その結果、大島本は紫式部の創作の時代に最も近い写本であるとの研究成果を得た。

研究成果の概要(英文)：I examined the friction of the original consumption of Oshimahon Tale of Genji. The result "ton" is erased "tomo", it is reorganized. The character of "n" is expressed as "mo" and "mu" in the 10th century stage. Since original "ton" is a vocabulary to which a meaning does not pass when it becomes so "tomo" the Oshima book turns into a duplicate copy in which the term in the 10th century remains being changed to future generations. As a result, the Oshima book obtained the result of research that it was a duplicate copy nearest to the time of Murasaki Shikibu's creation.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：源氏物語 大島本 青表紙本 藤原定家

1. 研究開始当初の背景

『源氏物語』諸本の本文の比較検討がなされていたが、本文の擦消・改変等については考慮されていなかった。

2. 研究の目的

大島本『源氏物語』は江戸時代に何回も校訂が行われ、当初の本文が改変されている。その結果、大島本本文の比較検討ができない状態である。この弊害をなくすため、大島本の書写当時の本文を復元して、諸本と比較検討できるようにするのが目的である。

3. 研究の方法

大島本『源氏物語』の原文を一文字一文字調査し、擦消・なぞり・校正の形態等を検討する。

4. 研究成果

1、はじめに

筆者は「写本学」を提唱している。写本を調査する根幹は、擦消・朱墨の抹消等で改変された文字を、当初の本文に復元することにより、そこから親本をうかがうことができると主張している。古写本は各時代の所有者が読むために、校訂改変しながら伝えられてきているのである。

この主張の実践として、池田亀鑑『源氏物語大成』の底本になった大島雅太郎旧蔵で古代学協会蔵の重要文化財『源氏物語』(以降、大島本と略す)の校訂されていない当初の復元を試みた。

大島本の原本を全53冊(『浮舟』欠)の本文を原本にあたり、一文字一文字を検討した。さらに、鎌倉時代の古写本等を原本にあたり、大島本と比較検討した。

この結果、大島本の本文「とん」が擦消されているか墨滅されて、「とも」に改編されていたことを発見した。この「ん」を「も」にしている例は、紀貫之自筆本を写したといわれる為家本『土左日記』にも同様な例がある。そうすると、大島本は源氏物語の原本に最も近い写本であると想定できる。

このような見方のもとに、「ん」の用例を上げて検討をする。

2、大島本「とん」の箇所

大島本は「やんごとなき」など「ん」を使っている例が多数ある。しかし、「とん」と書かれているのは、次の35例のみである。ほとんどが抹消されて「も」となっている。次にその箇所を挙げて説明する。

[本文箇所](巻数の順番通りに列挙した。大島本本文一行分。丁数と表(才)と裏(ウ)と何行目を表示し、状態を記した。)

『紅葉賀』

1、給夜の御とんに宰相の君もつかふまつり

(36ウ10)

「ん」を朱「ㄥ」で見消して朱「も」とする。

『須磨』

2、かのすま八むかしこそ人のすみかなとん(1才4)

「ん」の脇に朱「も」とする。

『薄雲』

3、御ありさまのおもふやうなることんかた(2才8)

「ん」を擦消して「も」とする。摺消すあまり紙に穴が開いてしまった。開いた状態で「も」を書いたために内面にも筆跡がある。

4、しめとはなれ御はかまきのほとんいみし(4才9)

「ん」を擦消して「も」とする。

5、き心越つくすとんかゝるみ山かくれにて(4才10)

「ん」を擦消して「も」とする。

6、へき事と君もなくめのとんさるへき(5ウ3)

「ん」を擦消して「も」とする。

7、しろききぬとんのなよゝかなるあまた(6才10)

「ん」を擦消して「も」とする。

8、とんかうこそ八おはすらめと人ノも(6ウ3)

「ん」を擦消して「も」とする。

9、雪ふかみみ山のみち八はれすとん(6ウ7)

「ん」を墨滅して「も」とする。

10、なかひたる心ちとん八はしたなくてや(9才1)

「ん」を擦消して「も」とする。

11、てうととんうつくしけにとゝのへさせ(9才4)

「ん」を擦消して「も」とする。

12、とんたえまなくつかはす女君もいま(11才7)

「ん」を擦消して「も」とする。

13、きつきの人も心のうちに八思ふことんや(11ウ6)

「ん」を擦消して「も」とする。

14、ものし給へ八おりふしの御心をきてなとん(12才9)

「ん」を擦消して「も」とする。

15、かうまつりてへたうとんゝ事をこた(12ウ3)

「んゝ」を擦消して「もゝ」とする。

16、をちかた人八心をくとんなに事とも(13ウ6)

「ん」を朱「-太線」で見消して「も」とする。更に朱で見消す。

17、ひさせ給て世のまつりことんうしろめた(16ウ9)

「ん」を朱「×」で見消して朱「も」とする。

18、く思きこえ給へきに八あらねとん又と(16ウ10)

「ん」を朱「×」で見消して朱「も」とする。

19、く事おほくてみちノのかむかへふミとん(17ウ1)

「ん」を朱で末梢し、更に墨滅して「も」とする。

20、なく心のうちにあかす思ふことん人に (19才8)
「ん」を朱「×」で見消して朱「も」とする。

21、とある事なとんをのつからうちましる (21ウ9)
「ん」を朱「×」で見消して朱「も」とする。

22、ていかめしうめつらしうし給人なとんむ (22才4)
「ん」を朱「×」で見消して朱「も」とする。

23、をちおほしめしてかさねて御いのりとん (26才1)
「ん」を朱「×」で見消して朱「も」とする。

24、とはりのよ八ひとんの時いたりぬるをお (29才2)
「ん」を朱「×」で見消して朱「も」とする。

25、つゝましくてふとんえうちいてきこえ (29ウ4)
「ん」を朱「×」で見消して朱「も」とする。

26、させ給つゝさまノのふミとんを御らんする (30才8)
「ん」を「〃」で見消して「も」とする。

27、さいとんこそそのこりなくひもとき侍りに (33ウ9)
「ん」を朱「×」で見消して朱「も」とする。

28、やむへきことんなくて侍りぬへかりし世 (34ウ2)
「ん」を朱「×」で見消して朱「も」とする。

29、ち空のけしきにつけても心のゆくことん (36ウ5)
「ん」を「〃」で見消して「も」とする。

30、すこしひかことんし給つへけれともいとう (38才4)
「ん」を朱「〃」で見消して朱「も」とする。
『鈴虫』

31、八れたまひて上達部とんまいり給へるか (17才6)
校訂なし。
『御法』

32、をのかしゝさへとんことふえのねをもけふ (6才7)
「ん」を朱「〃」で見消して朱「も」とする。

33、かりけるやむことなきそうとんさふら八 (19ウ4)
「ん」を朱「〃」で見消して朱「も」とする。

34、はかなくしいて給ことんなに事に (22ウ1)
「ん」を「〃」で見消して「も」とする。
『宿木』

35、すかたとんなれと猶け八ひやしるからん (108ウ9)
「ん」を朱「〃」で見消して朱「も」とする。

以上、35例を見出した。ただ、『鈴虫』は「上達部とん」とあり、擦消抹消がないが、気付かなかった可能性がある。

この外に、
『若菜上』
うちてにしひんかしにとんしき八十くるくの (72ウ10) 校訂なし。

つかうまつらせ給へりとんしきなとおほやけ (77才6) 校訂なし。

『幻』
ひかふも夕殿にほたるとんてとれいのふること (20ウ6) 校訂なし。

『宿木』
たくしことにて五日のよ大将殿よりとん (しき) (94ウ7) 校訂なし。

とあるが、この「とん」は、「とんしき (頓食)」と「ほたるとん (蛸飛んで)」である。普通の読みであり、擦消訂正も行われていない。

「もん」を概観すると、『紅葉賀』1例、『須磨』1例、『薄雲』28例、『鈴虫』1例、『御法』3例、『宿木』1例である。特に『薄雲』の巻が特に多く表れていて、五種類の校訂がなされている。校訂の仕方が五種類に分類できる。

1、最初の3から14までの「ん」は穴を開けるほどに丁寧に擦消した上に「も」と書く。

2、15は「んゝ」を二本線で抹消して脇に「も」と書く。

3、16は「ん」を朱「-太線」で見消して「も」とする。更に朱で見消す。

4、17から25と27・28は「ん」を朱「×」で見消して朱「も」とする。

5、26・29・30の「ん」は「〃」で見消して「も」とする。

最初は丁寧で、後半は事務的になる。そこに何らかの意図は見られないが、『薄雲』が親本の「ん」を保存していたことが判明する。後世に「も」と校訂した。他の巻は、書写をする際に、たまたま親本の姿が違ったものであるが、『薄雲』は親本の通りに書写をする姿勢であった。

そうすると、大島本の親本は「とん」の文字を遺した写本になる。しかも、「も」と訂正しなければ意味が通じない。どうして「ん」が書写されていたのであろうか。

「ん」は、漢字から仮名へと変化する十世紀段階に、「む」か「も」を「ん」が表していたことは従来から知られている。この「ん」を「も」に書いている作品に、『土左日記』がある。次に、『土左日記』の「ん」について検討する。

3、為家本『土左日記』との比較

定家が蓮華王院に所蔵されていた紀貫之自筆の『土左日記』を原本通に書写をした。『土左日記』の古写本は尊経閣文庫蔵「定家本」と大阪青山学園蔵「為家本」が国宝に指定されている。蓮華王院経蔵に納められている紀貫之自筆本一巻をとともに書写をしたという奥書が定家本にある。しかし、定家本と為家本の巻頭部分が大きく相違している。巻頭二行分を行数通りに記して比較する。

定家本は、
をともすといふ日記といふ物
をむなもして心みむとてする (なり)

為家本は、

乎とこん数なる日記といふんを
をむなんしてみんとて数るなり

とある。第一に為家本が貫之本を筆跡通りに写しているといわれている。そうすると、定家本は定家時代に意味が通じるように、鎌倉時代の現代語訳をしていることになる。

池田亀鑑は「乎とこん数なる」(『古典の批判的処置に関する研究第一部』180～181頁、岩波書店、昭和16年刊)を解説して、

これは「ん」が「も」「数」が「数」なることを注記したもので、貫之自筆本の假名が読みにくいものであつた爲、何人かが注記しておいたのをそのまま寫たのであらう。秋萩帖には「けき」「ひし」の各二字を二回書きなほした所があるが、これは原本の字形を忠實に傳へようとする臨寫者の良心を示すものとして注意されるが、この土左日記の場合は、必ずしも字形を忠實に示さんがために書き直したのではなく、その文字の字源を示した所の一種の註記と解すべきものであらう。従つて爲家の所爲となすべきではなく、おそらく貫之自筆本にすでに後人によつて加へられてゐたものとすべきであらう。「すといふ」「こゝろみん」等の傍書も、巻首のこのあたりに、一まとめになされてゐたものと思はれるのである。

と述べられている。この箇所の説明に「字形を忠實に示さんがために書き直したのではなく」と解し、「爲家の所爲となすべきではなく」として、「貫之自筆本にすでに後人によつて加へられてゐた」と説く。

この記述は、池田の推測のみである。そうすると反対の見方として、為家本書写時の書入であつたとも考えられる。その根拠は、為家本の2丁表6行目(二十三日条)に、「にもあらずなりこれそたゝはしき」とあり、「も」を墨滅して脇に「ん」を注記していることにより、親本の通りの筆跡にしている。この行為は、親本には「ん」をとあつたが、写す際に意味を取つて「も」に書いてしまったのを、本文校正で字形通りに直したと思われる。意味の通じない「ん」をわざわざ「も」を消してまで書いたのは、原本通に写す姿勢であつたためである。

為家本の書写の姿勢は、親本の通りに写すことが『土左日記』から見えてくる。大島本の場合も同じであらう。大島本には、定家の注釈の奥入があり、定家校訂本である青表紙本系統の写本として知られている。大島本の本文が意味の通じない「とん」が存在するのは、『土左日記』と同じ方法である字形まで親本の通りに書写した本であり、定家校訂を経ない写本であつたからである。

定家は、『土左日記』の定家本と為家本と比較したように、必ず意味が通じるように源氏物語本文の改変を行っている。しかし、大島本は、「もん」とあることにより、定家が最初に書写をした当初の姿を遺した写本と

なる。定家は親本通りに写したのである。それが大島本である。

4、大島本の祖本

源氏物語の注釈書『原中最秘抄』によると、「大掖芙蓉」の箇所を俊成に尋たことが記されている。その箇所は、

更衣をは女郎花と撫子とにたとふみな二句つゝにてよくきこえ侍るを御本俊成卿本事也、未央柳をけれたるはいかなる子細の侍るやらぬと申たりしかは我はいかてか自由の事をはし侍るへき行成卿の自筆の本に此一句をみせけちにし侍りき紫式部同時の人に侍れは申あはするようこそ侍らめとて是も墨を付けては侍れ

とある。定家の父である俊成が所持していた源氏物語の写本は、藤原行成自筆によるとある。そうすると、大島本の祖本を行成本と想定できる。行成は、源氏物語の著者である紫式部と同時代である。行成は10世紀の人であり、「とん」の文字が遺されているのも当然な現象である。

本研究の成果は、大島本源氏物語の原本を復元することにより、紫式部の原稿を清書したといわれる藤原行成筆の源氏物語を窺える唯一の写本である、との結論に達した。

5、主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

藤本孝一、写経の定規、いとくら、国際仏教学大学院大学日本古写経研究所、8号、2013、pp. 5 - 6

〔学会発表〕(計 1件)

藤本孝一、京都産業大学日本文化研究所主催、後桜町天皇二百年祭記念シンポジウム女帝の歴史と文学 宸翰を中心に、御所伝授について、2013、

〔図書〕(計 1件)

藤本孝一共著、翻刻 明月記一、朝日新聞社、2012、